現代名作集（四）

現代文学大系　66

筑摩書房

現代文学大系66　現代名作集(四)

昭和四十三年六月十日第一刷発行

著者代表者　埴谷雄高

発行者　竹之内静雄

発行所　株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一―七六五一（代表）
振替東京四一二三

装幀　真鍋博

本文用紙　三菱製紙株式会社
表紙クロス　東洋クロス株式会社
本文整版　株式会社精興社
本文印刷　株式会社精興社
製本　株式会社鈴木製本所

現代名作集(四)　目次

埴谷雄高
虚空……五
安部公房
時の崖……二六
中村眞一郎
恋の重荷……三四
藤枝静男
欣求浄土……五六
森茉莉
気違いマリア……六九
小沼丹
汽船……八二
小島信夫
返照……九一
井上光晴
眼の皮膚……一〇六
三浦朱門
セミラミスの園……一二三
近藤啓太郎
赤いパンツ……一二八
曾野綾子
海の御墓……一三九
石原慎太郎
完全な遊戯……一五六
城山三郎
メイド・イン・ジャパン……一七四
有吉佐和子
海鳴り……二〇〇
開高健
パニック……二一八
深澤七郎
南京小僧……二五一

北杜夫
霊媒のいる町……二五六
小川國夫
枯木……二七〇
なだ・いなだ
帽子を……二七三
倉橋由美子
パルタイ……二八二
星新一
ボッコちゃん……二九六
瀬戸内晴美
あふれるもの……二九九
水上勉
蜘蛛飼い……三二八
年譜……四五〇
解説……奥野健男　四五八
河野多惠子
幼児狩り……三三八
三浦哲郎
初夜……三四五
山口瞳
昭和の日本人……三五九
池田得太郎
家畜小屋……三六六
山川方夫
最初の秋……四〇九
永山一郎
皮癬蟯の唄……四二四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

現代名作集
(四)

虚　空

埴谷雄高

私は、分水嶺に、ひとつの感じがあるように思う。

大地が虚空へせりあがった果てには、やはり、こうした場所が出来るのである。

地の果てというと、この大地の上へひとつの物尺をあてて、そのまま真直ぐ気の向いた方へ無限に延長した何処かの果て、荒涼たる氷海に閉ざされた暗澹たる土地を想像しがちであるが、もしこの大地にそって幾日か進めば、すでに私達はその地の果てに達しているのである。そこへ達すると、私達の地を這う習性が試されるように思われる。小さく光った湖や光を吸いこんだ黒い森や白い蒸気がたちのぼっている裸かの土地などが、そこから神々の庭のように眺めおろされるが、と同時に、虚空に接している屋根から真上の蒼穹を眺めあげると、不意に一歩踏みのぼりたくなるのである。私はすでに幾度か、強い風が鳴っている虚空を見上げながら、山の背に佇んでいたことがあった。目に見えぬ虚空のはためきは、すぐ真上で鳴り響き、果てもない蒼穹をかすめ通っていた。すると、私の胸のなかでかすかな羽音がしてくる。どこかで弓の弦が顫え、次第に強く弾んできて、ついには耳許をひとつの矢が羽ばたきのぼってゆく。そんなときいつも、強い風がはためき鳴っている澄みきった蒼穹を見上げている私のなかで、切なげに呻くようなひそかな喘ぎが聞かれるように思う。《Anywhere out of the world !》と。虚空には透明な風がはためいていた。その何処まで羽ばたきたてば、そこへ達するのか、ただはためく虚空を見上げている私には解らない。けれども、それは、顫える軀をやっと支えて山の背に立っている私のなかに、いつも聞えた。それは虚空へ呼びかけるようにいつも聞えた。そうである。この世のほかの何処でも。——そんな何処かへ架かろうとして極まっているひとつの地の果ての感じは、虚空へのびあがった分水嶺に、たしかにあるように私は思う。

ところで、私はさらに思うが、宙に浮いた空間にさながら私達の生そのもののようにひとすじのかぼそい道となってうねりつづいているこの分水嶺は、やがて、自身でもしかといえぬひとつの習性へ私達をひきもどし、そして、ついには前のめりに屈みこませてひたすら前へ歩みださせてしまうのである。虚空へ呼びかける私達のひそかな低い喘ぎを、わずか数秒しかつづかせぬように。けれども、そのとき、もし私達がいわば、一点となってのびあがったような分水嶺、つまり、蒼穹に迫って高くそそりたった円塔のような山巓に立てば、そこで、道もまた極まってしまう筈

である。そうである。私達を支えていた一本の水平軸は、そこでなくなってしまうのである。大地に平行した視界圏はそこできれてしまい、小さく光った湖や黒い森や白い蒸気がたちのぼっている裸かの大地へ降りてゆくあの水平軸の習性を忘れ果てて、真上にはためく虚空をひたすら垂直に眺めあげながら、私達はその場に佇みつくしてしまっているのである。

私はさらにひそかに思うが、そのとき、そこで起ることは、恐らく、そこにしか起り得ないものに違いない。そして、私はそのような山を知っている。

私は、紗帽山のことを書いておこう。

その乳鉢をふせたような、銀色に光った葉々に覆われた円い山を眺めていると、深い内部からもりあがってくる重い落着きが感ぜられた。それは数万年にわたる風雨のなかに、同じ美しい形をつづけてきた重さに違いなかった。私はその山を一日中眺めていた。そこに描かれている比類もないほど完璧な円形は、私の視線を吸いよせるひとつの休止点のように作用して、ほとんど数分おきに、その山のどっしりした形に私は眺めいった。

その円い弧にそって陽は落ちた。赤銅色の円盤が顫える大気のなかにするすると滑りおちてゆくさまを見守っていると、遙か下方に白く光ったひとつの幅広い帯が認められた。あの蒸れるような市街にそっている水域であった。それは河口近くでわずかな砂洲を鳥の翼のように拡げている淡水河に違いなかった。白い放射状の背光を負った山は、目をもどすと、こちらへいくぶん近づいたように見えた。

「あすこまで登れないものかしら」

この倶楽部をあずかっている中年の婦人が膳を運びあげてきたとき、私は訊いた。

「いいえ、とても。」私と並んで硝子戸越しに目をあげた婦人は、驚いたように眉をひそめた。

「蛇が多くて……。」

「ほう、蛇がいるんですか。」

「ええ、もう、この山は、このあたりでも、格別、蛇の名所といわれてるくらいでございますから。」

「秋の今頃でもいるんですか。」

「いえ、今頃がいちばん多うございましょう。真夏はやはり蛇でも、暑そうにだらりとしてますわ。今頃は、この倶楽部のまわりでさえ毒蛇がとれるんでございますよ。」

「ほほう、毒蛇がいるんでは参ったな。」

「ええ、ですから、あの山にのぼったひとなど、まだ誰もございませんでしょう。」

私達は黙った。薄闇に包まれてきた山腹では、無数のひとびとが将棋倒しに押しあって歩いているようなざわめく響きを、樹林がたてはじめた。

私は、数日前に、この山を知った。

この島は、熱風の島であった。大気そのものが一つの陽炎となって舞いのぼっている市街を、そのとき、私は歩いていた。

道の両側からしなやかな翼を深い森のように延ばしあった長い並木を通ったとき、私は一軒の店へはいって、その樹の名を聞いた。合歓木に似た小さな円い葉を規則正しく並べて、ゆるやかな波斑をたてて揺れたつ樹であった。蒼白な肌をしたその店の少女はためらうまなざしで私を見上げた。私が彼女の傍へ寄ると、それは、幾度聞いても、ホーボクと聞えた。

「ホーボクと書きます。」

彼女ははっきりといった。

「ホーボク……？」

「そうです。ホーボク、と、書きます。」

彼女は一語ずつ区切って、はっきり繰返した。私達と同じ言葉を教えられてその他国人の前で発音する羞恥が伏目になった彼女から悲しげに響いた。一瞬、息をとめて頬をそめた彼女は、前へ屈むと、店の机の上に字を書きはじめた。書きはじめると、すぐ解った。鳳凰木だった。私は、しなやかに揺れているその樹の美しくならんだ葉を眺めた。この円い葉をびっしりつけた枝が風に揺られて遠くに立っていれば、たしかに一羽の鳳凰が大きく羽を拡げていると見えるに違いない。

私は、それから、日蔭ばかり索めて歩いた。大きく羽を拡げて風に揺れている樹が私を誘っているのだった。その市街は傾斜地ではなかったが、次第に内側へ廻ってこの蒸された市街の中央部へ向っている大きな輪道につれてまわってゆくと、一つの高台へ昇ってゆく感じがした。ひょろ長い椰子の葉がわさわさと揺れている公園へはいって行った私は、その公園の隅で思いがけなく、白昼から廃墟のようにきりはなされてしんと静まりきったひとつの大きな建物へつきあたった。

そこで数瞬の錯覚におそわれたのは、その内部が覗かれるそこはたしかに博物館に違いなかったが、そこへはいりこむ決意をした私があたりを見廻すと、入口がなかったことである。その公園からいちど出て、この公園を囲んでいる別の道路に立ってからでなければ、私はそこへ入れなかった。人影がないその博物館は、私にはひそかな安息所と思われた。遠い窓からの採光しかないため薄暗い内部に、ずらりとならべられた硝子のケースにはさまれて歩くと、ぼんやりした影が両側に現われた。しーんとした館の内部に、私は誰かの影と歩いているようだった。そこに映った自分の輪廓から軀を斜めにそらして覗きこむと、真横を向いて長い嘴を開いたジャワの影絵人形や腰をひねって踊りだしかけたシーヴァの浮き彫りなどが硝子の向うに重く沈んでいて、それらのあいだに細長い装飾画のように置かれた繊細な土偶人形の列は、生きている侏儒のようにこちらを眺めていた。薄暗いなかで覚えるあの安息が私にやっと

もどってきた。その冷えた空気のなかを通ってゆくと、私は自然に露台へ出た。

その露台からは、私が通ってきた公園が、ひっくりかえされた裏側のように見下された。それはこの露台が扇の要のような角度で開いているためかも知れなかった。高い椰子の葉にかこまれて盆地のように落ちこんだ広い公園のどこにも、ぎらぎらと眩ゆい陽炎が燃えたっていたが、遠くの噴水場の縁に、やっと歩きはじめた位の女の子を乗せて、ひとりの母親が写真のピントを合わせているのに、私は気づいた。その母親は濃い緑色のパラソルをうまい具合に自分の肩先へさしかけて、見たところ、巧みな平衡をとっていた。だが、女の子には覆いがなかった。私は露台の縁に立って暫らく眺めていたが、その母親は緑のパラソルをゆらゆら揺らせながら、長いあいだピント・グラスを覗きこんでいた。私はむっとあたりが蒸れるように不快になり、その露台から次の部屋へはいりこんだ。

そして、そこで、私はその山を見出したのである。

この部屋も窓が遠く薄暗かった。奥行がひろい部屋の中央には、一つの大机が置かれてあるだけだった。そして、その上に垂れた薄白い圏の中に、それはあったのである。それを一瞥したときの印象は、深い森の果てで、いきなり小人国の世界をのぞきこんだ感じだった。そとの眩しい陽光から、目を細めながらはいっていった私は、ぴたりと立ちどまった。薄暗い私の眼前に、横へたなびく霧のなかからつきたった遠い山々の屋根が、すべてが芥子粒ほどにできている小人国の俯瞰図のように眺められたのであった。私は部屋を透かして見た。背を屈めた私に解ってきたのは、そこには、或る種の博覧会などで見受けられる山岳地帯の小さな模型が、隙間もなく並べ置かれてあったことである。私にはそれが解った。そこへ近づいてゆくと、山々のあいだに精巧にはめこまれた樹海や円い沼さえはっきり認められてきた。すると、そのとき、鼓動が私のなかでどきんと敲った。私にはさらに解った。それは、繊細な細工で仕上げられた小さな精密な模型であったけれども、単なる地勢の模型ではなかった。この自然がこれまでなしとげた作用を示す、特殊な地殻の模型だったのである。

薄白い部屋の大気は、重く垂れていた。小さな山々の屋根はその下を網の目のように走っていた。薄い外皮をまとってぽかりと陥こんだ噴火口、一本の鉄棒を真直ぐに天空へつきたてた垂直形式、沼地へなだらかに眠っている半月形……それらはすべてその内部から、不屈な力で盛りあがっていた。どちらかといえば、私自身より私を生んだ条件自体にかたよった関心をもっている私は、そこから眼がそらせず、立ち竦んだまま覗きこんでいた。高い蒼穹へ向かうように大地から頭を擡げたそれぞれの形は、それぞれが辿りついた年代に憩っていると見えた。けれども、もしこの薄暗い部屋の何処かから湧き起った数片の綿雲がかかってこの山々を覆ったら、その鋭く削られた屋根をさらに険

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しくつきたてたり、厚い壁となって横へ膨らみあがったりして、ゆらりと動きだすところが見られるに違いなかった。それほど不屈な力でつきあげていた。重い昂奮に揺すられはじめて次々と目を移した私が、巨人がこのんで憩いそうな平たい大きな台地から向うへ目をあげたとき、さらにどきんと鋭く鼓動が敲った。

その中央に、仄白い真円な山巓を示した紗帽山があったのである。

この自然のなかに真白な巨大な手がのびてきて、ひとつの鉄製の椀をぽかりとふせて、そっと慎重に持ちあげたあとに崩れた跡もなく残った山があるとすれば、それはこの完璧な円形になる筈であった。もしそういい得れば、これこそ自身に憩っている美しい円なのであった。たとえこの山裾へ誰かが手をかけてぐっとひき起しても、それはこれと同じ美しい形でぐるりと廻るのだろう。私は目を下げて、素早く貼紙を読んだ。……紗帽山、地質学上はトロイデと読めた。

私はあたりの地形をぼんやり眺めまわした。ベヂオニーテ、ホマーテ、コニーデ、ベロニーテ、アスピーテ、マール……。私は、次々と貼紙を読んでいった。そこに置かれてあるすべての山が強烈に自身をまもっている特殊な型を示していた。けれども、ぐるりとまわった私の視線はまた紗帽山へもどった。それは自身に憩って、それ以上にも以下にも動かないような美しい形を見せていた。私はじっと眺めつづけていた。私達の真近かで――遙かに遠い何処かとまったく同じような非常に真近かなところで、目に見えぬ二つの独楽がまわっていて、私達のあいだに近づいたり離れたりしながら、ぶんぶん鳴りはじめたと思われた。私はその山肌へ頬がつくほど顔を寄せた。すると、そのとき、白く閃く何かが頬をかすめて羽ばたきのぼった。私は思わず顔をあげた。ほのかな翳を帯びた山嶺の完璧な円を見せて、山はぐいと下った。それはたしかにその距離以上に下った。目に見えぬ独楽が山嶺の上でぶんぶん鳴っていて、その風を切る回転ごとに目に見えずり下って行くようだった。私はさらに背をのばしてみた。それは上方の天界から見下されるようにぐーんと下って行った。私はついに爪だたねばならなかった。そんな自身がするするのびる魔法の円柱にでも乗っているように、遙か下方に小さな円い山巓が見えた。そのとき、虚空で鳴るような澄んだ響きが、私の耳許に聞えた。《hovering……hovering》驚いた私は、頭を擡げた。高い大気のなかで緻密な金属がうちあうようなその澄んだ音は、思いがけず、私の胸のなかから鳴ったのである。hover……この言葉は、遙か天空にあがった鷹が下方に獲物を求めながら悠然とゆるい円を描いて舞っている意味をもっていたような記憶がした。それが、不意と、薄暗い記憶の隅からでてきた。

私は憑かれたように、あたりを見廻した。誰もいなかった。すると、自分でも驚くほど素早い行動が私に起った。

私は部屋の隅に置かれてある椅子を運んでくると、それを一瞬でうまい具合に机のはしへ乗せた。そして、平衡をとって倒れぬようにその上に乗った私は、継ぎ足された椅子の高さの数倍のびあがった感じになって、下方へ目をそそいだままゆっくり延びあがってみた。薄白い大気は靄のように漂っていた。そのあいだから、下界の庭が揺れ拡がって展いてきた。そこには低い綿雲がかかっていた。まず黒い柱を天空へつきたてた鋭いペロニーテが見えた。そして、どかりと陥こんだ大きな噴火口を開いたホマーテや深く屈曲した海岸線を描いた穏やかなマールの真んなかに紗帽山はあって、それらに護られ囲まれたように、地の壁のほのかな翳につつまれながら、その美しい円が遙か下方に見えた。《hovering…》と、私のなかからまた呟きがでた。大きな羽を拡げた鳳凰が果てもなく高い蒼穹から遙か真下を眺めながら、ゆるやかに舞っているような気がした。私は両手を翼のようにあげると、平衡をとって軀を曲げながら、不意と視線をぐーんとおとしてみた。紗帽山は私の真下にぐんぐん近づいてきた。《hovering, hovering, hovering…》虚空にはためく風を切るような澄んだ響きをまわりの大気のなかにたてながら。

私は、それから、その山へ趨くバスの発着所を索めて、その山へ向ったのだった。

山は深い闇につつまれていた。目の前に拡がった闇に見いっていると、けれども、巨大な厚みをもったものが遙かな闇との境にどっしりとそそりたっていた。その重い孤独は私のなかにも感ぜられた。ここから見える中庭のはずれに大きな灯笠となって架かっている高い門燈があって、そこからおとされる薄蒼い光と闇とが区切られる境に、数本の蜜柑の樹が立っているらしかった。葉々は闇へとけこんでいたが、その目にとまらぬ薄蒼い境から支えもなく浮きでて黄ばんだ蜜柑が見えた。それは静かに浮いていた。たしかに背後に沈んだ葉々が揺れていると思われるのに、そこに浮んだ蜜柑は動かなかった。ここからじっと眺めていると、光と闇の境に淡く浮きでたその蜜柑は、幸福の象徴のように見えた。それは、宙に浮いていた。小さな円い黄ばんだ形を闇からのぞかせて浮いていた。私は頬杖をついたまま、そこを眺めていた。すると、闇の境からひとつの影が現われた。ゆっくりと光の圏へはいってきた影は、背後の闇に縁どられてさらにのびあがったように見えたが、その背はたしかに高かった。私がここへ着いたとき、荷物を運んでくれた若い男らしかった。私が頬杖をしたまま眺めていると、その男は肩からゆっくり手をあげて野球のピッチングに似た動作をしながら、光の圏をゆっくり横切って行った。それが闇へ消えこむと、厚い壁がゆるく閉じられたようにどっしりした闇のみがのこった。私はなお闇をじっと眺めていたが、やがて、机へ向った。

貴方に手紙をあげる約束しながら、いままで上げられな

かったのは、私がこの島で蒸しやきになっていたからです。貴方はジャングルのなかで苦しんでいると書いていましたが、私も熱気のなかにうだっていました。さて、ようやく貴方へ手紙を書ける夜になったのです。

貴方が私の偏よった性癖を非難されたのは、恐らく誤ったことではないでしょう。貴方の手紙を読んだとき、私が自身へ呟いたのは、貴方の非難に答えるすべがまったくないということでした。たしかに、私は出られぬところから出たがっているのです。薄白い光が真上からさしてくるジャングルの隅に凝っと息をひそめている貴方には、こんな私が、虚空を覆って聳えた巨木にのぼりかかっては落ちる一匹の不格好な蟻ほどおかしく思われるでしょう。それは天空へつきぬけてしまうことはおろか、虚空に聳えた巨木の先端までものぼれないさまです。けれども、私は思いつづけているのです。この自然や歴史の幅からいかにかして遁れられぬか、と。一匹の不格好な蟻となって地上を這っているとき、私はそのことばかり思いつづけて、そして、地上の蜜に気づかないでいるのかも知れません。

もちろん、私は、私が自身のなかに生みだしたものは、この自然への凝視から出発していることを認めます。私の前には、恐らく、ひとつの核がある。私はここで貴方といっしょにヘラクレイトスを読んだ頃を想い出します。

入れ、ここにも神々がいる。

私達は、この言葉がどのように膨らみあがって私達の歴史のなかを歩みつづけてきたかを、あのとき知りました。あの暗い研究室で小さなフラスコを振っていた貴方と私は、それが手にとらえられる精密なかたちとなって動いているのを知って、あの悪魔学の古い蝕まれた書冊の前でも、宵闇が迫るのも覚えず、凝然と坐りつづけていたのを、私はまざまざと記憶しています。私達が耳を澄まさねば聞えぬひそかな足音をたてて、それはたしかに歩きつづけているのです。たしかに、私達の精神がこらす凝集はひとつの形まで膨らみあがらねばやみません。恐らく私達の精神の凝集は、目に見えぬ一つの核にそそぎこまれて、次第に、容易に手に触れ得る見事な形へまで膨らみあがるのでしょう。そして、そのとき、私達がそこにつけ加えたものはそこに隠れてあった以外の何物でもないことは、驚くべき真実です。私が驚異の目を瞠ったのは、すべてそこにあるものはあったものでしかないという自然の真実でした。一つの核は、自身のなかの力を動かされてのみ膨らみあがるのでしょう。私はそれを認めます。私はその根源的な性格は認めているのです。

だが、そこで私ははたと立ちどまるのです。私はそれ以上は認容したくないのです。例えば、ここに私が坐っていて、ついに迫りつくし得ない何かが透明な最後の壁を透しながら、永劫にこちらを眺めていると、影のような誰かが

耳許で囁くとき、私は激しく自身を嚙んでいるのです。貴方にこの手紙をあげるのは、そのとき嚙んでいる私の力が貴方に反響して、せめて架空の核をひとつ私達の前へ置いてみたいからです。

私達がここにもち得るものは、自然の本に読む言葉より恐らく
豊饒であるに違いない。

これが、そのとき、私達のひそかな望みになる筈です。ジャングルで苦しんでいる貴方の身を思いやっているとき、私は偶然一人の友人から、ビルマのシャン地方にあるひとつの密林の話を聞きました。この密林は周囲七十哩ほどで、遠くから眺めると、土人が怖れている形もなくただ薄黒い幽霊の棲処のように見えるそうです。そこには四つの足で走る如何なる獣も棲んでいません。彼等がとって食う他の生物が棲んでいないのです。この密林に生えた樹は数十呎に延びていて、この森にはいったばかりのところでも道がありません。正午、太陽が真上にさしかかったとき、高い樹と樹のあいだにあるわずかな空間から黄ばんだ光が、数瞬、さしこんできます。けれども、太陽が僅かな角度でも斜めになると、陽の光は見透せぬほど高い虚空にとまって、森全体が薄暗くなってしまうのです。この密林にある樹はその太陽の光を索めてひたすら上へ延びあがり、互いの樹上へのびあがろうと競いあっているそうです。そして、あまりに上へばかり延びようとする樹は、数百年にわたって同じ繊維質が重なり積まれた軟らかな土壌の上に立って、その根が弱くなっているとのことです。風もない或る日、その樹のひとつが倒れることがあります。数十呎に直立したその樹が真近かな樹へのしかかると、その他の樹はさらに隣りの樹へのしかかり、もはや次々に将棋倒しとなってひとつの列に打ち倒れてゆくのです。その響きを森のそとで聞いていると、はじめ遙かな天空の果てから近づいてくる遠雷がずしんと大地を揺りたてる重い響きをたててはずみあがり、そしてそのあたりのすべてを圧し潰して轟々と虚空を走ってゆくのに似ているそうです。ただこの森の響きは容易にとまらない。もうとまるかと思うときにも、息をとめて聞きいっているこちらの胸を締めつけて、それは数十間、数百間、或るときには数哩にわたって凄まじく倒れつづけて行くそうです。そんなときは、日頃ひとの近寄らぬこの薄暗い森が自身をもちきれなくなった狂暴な発作に憑かれたように思われるとのことです。薄暗い森のなかから、その森自身をひき裂きこなごなに敲ち砕いている果てしない咆哮が聞えるのです。そして、その森のなかに一筋の真直ぐな道が展けてゆきます。薄暗いなかを太い幹が斜めに切って倒れてゆくと、そこにぽかりと開いた空間にわーんと羽虫が舞いあがってその背後から或いは前から眩ゆい陽の光が揺れる垂幕のようにさーっと射しこん

でくる。それはその樹が自身を通せるだけの幅狭い道なのです。果しもなく広く薄暗い森のなかにそこだけぽかりと陥こんだように一筋の真直ぐな道ができるのです。私は想像できます。樹が倒れつくしてしーんと静寂につつまれてしまった森のなかの出入口もない一本の長い道にゆらゆら揺れている陽光の寂莫を。この樹が倒れてゆくさまを、ときたま、高い台地から土人が眺めていることがあるそうです。その土人にこの薄暗い森へはいってみないかと誘ってみると、身を顫わせて拒むとのことです。けれども、その土人達の古老を無理にひきつれて、この薄暗い森にわけいり、そこにできたその一筋の真直ぐな眩ゆい陽光の揺らめく道を指し示したら、恐らくいうでしょう。ここは神の通った道だ、と。そしてそれが貴方なら恐らくこう直截にいうだろうと思います。太陽を索めすぎて根元が弱くなった樹が倒れたのだ、と。

私は、貴方にいいたいのです。どこにもそのシャン地方の密林はあるのだ、と。私は虚空に轟々と走ってゆく響きをつねに聞いているような気がするのです。想いかえせば、貴方といっしょに愉快な小悪魔どもが飛びはねるあの悪魔学の歴史に読みふけっていた頃も、その私の性癖はあった筈です。私が時折、はたととまったまま数瞬ぼんやりしているのに貴方も気づいていたことと思います。そうなのです。私がそこから出られぬ歴史のなかを歩いているときでも、私の視界をひたすら水平に誘うこの大地の上の何処かを歩いているときでも、私は、時折、はたと憑かれたように立ちどまるのです。そして、私は真上の虚空を眺めあげます。虚空……そこには目にとまる何物もなく、私が敢えて何物かをつけ加えるひとつの蜃気楼の影だにないとしても、しかもなお、私はそこに轟々と走りかすめてゆくものから目がそらせず、真上に顔を向けたままじっと佇みつくしているのです。私はでき得べくんば、そのまま化石してしまいたいくらいです。こんな私の衝動を、貴方はひとつの自覚とは認めないでしょう。だが、私はそれをひそかに《垂直の精神》と名づけているのです。そして、それが私の自覚です。

貴方はジャングルで苦しんでいます。貴方がそこから帰ってきたとき、恐らく貴方はこの私が見知らぬ多くのことを語ってくれるでしょう。だが、私は貴方が何かの機会であの薄暗い森が幽霊の棲処のように拡がっているシャン地方を訪れていることがあったら、なお喜ばしいと思っています。そして、そのときは貴方は、たとえ根元から倒れても虚空につきたつ以外にない私の自覚を吟味してくれなければいけません。

翌日、友達への手紙をもった私は、裏庭から道路へ降りて行った。そこは傾斜になっていて、繁った蜜柑の樹が数本立っていた。手が届くところに、幾つも黄ばんだ実がついていた。私はそれをもぎとると、道路をあがって行った。

崖になったところに、倶楽部の婦人が立っているのが見えた。

「何処まで……？」

上から声をかけた婦人は、仰ぐように高く見えた。

「郵便局まで行ってきますよ。」

「郵便局の上に水源地がありますけど、そこまで行ってこられたら、好い運動でござんしょう。」

「いや、もっと上まで行ってみようと思うんです。」

「あっちは……蛇が多うござんすよ。」

彼女は昨夜の会話を想いだしたように崖から乗りだした。

「気をつけなさらんといけませんよ。あすこまでゆくと、誰ひとりいないんですから。」

私は大きく手を振った。

私はこの奥にあるという風の名所まで行ってみるつもりだった。道は紗帽山を左手に見て長い帯のようにぐるりとまわっていたが、次第に右手へそれてゆくらしかった。バスの発着所や郵便局が階段のようにならんだ区劃を過ぎると、道は急な傾斜になっていた。のぼってゆく山の正面に削られた灰白な岩肌が何処にも見られるのは、石灰が多い地質らしかった。私は汗ばんできた。片側が崖になっている道の縁に、すっと真直ぐにつきたった蛇木が見えた。それは太い蛇が直立している形そっくりだった。椰子よりいくらか低い高さで、やはり椰子に似た長い葉をつけていたが、見た瞬間に思わず息をのむのは、その幹が根元から先端まで褐色に光っている鱗で覆われていることだった。次次と根元から重ねられた厚い、滑らかな木肌が鱗に見えるのだった。しかも、それが私の気を牽きつけたのは群生していないことだった。道が大きく曲って新たな風景が展いてくるところなどに、それはただ一本すっと脅かすように立っていた。こいつだなと、私は胸のなかで呟いた。ポケットから蜜柑をとりだすと、私は道を歩きながら、その蛇木を狙って投げてみた。外れて当らない蜜柑は、小さな黄ばんだ点となって、崖下の叢へ落ちて行った。息切れがしはじめた頃、私はようやく笹が多い地点まであがってきた。そこは道がきりたった山にそってぐるりと廻っているところだった。笹は前へのめったように傾いで、絶えずふるえていた。その笹の激しい揺れかげんで、そこが風の名所と解った。

そこは、その名に適わしい風の名所だった。無造作にふらりと踏みこんだ私はいきなり目に見えぬ腕に肩先を摑まれると、大きなぶんまわしにかかったように、たちまち軀を捻じられつきもどされた。私は後ろ向きの姿勢で進んでみた。駄目だった。この急な曲り角を吹きぬけてゆく風は、透明ななかに凄まじい力をひそめていた。強い力をもった侏儒がそこに無数に隠れているように、平面にはって進む箇所はたちまちぐんぐんと無数の手につきたてられて、あっと思うまに腰がくだけてしまうのだった。慎重になった私は、曲り角のこちらに腰をおとして向うを窺ってみた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com